

# 構文 *être à + infinitif* に現れる副詞 *toujours/encore* について

三浦龍介

## 1. 評価用法 *être toujours à + inf.* とアスペクト用法 *être LOC à + inf.*

現代フランス語辞書類に照らせば、構文 *être à + inf.* は事態の「展開中」を示す純粋なアスペクト表現とされ、同様に「展開中」を示す *être en train de* の類義表現とされているが実際には、純粋な進行相を示す表現として用いられることは少なく、とりわけ現代語においてはもっぱら話主の否定的評価を示す場合が多い (cf. (1)–(3))<sup>1</sup>。

- (1) Eh ! non, elle est toujours à me lancer des mots malins. (Louis-Benoît Picard, *La petite ville*, 1801) (Gougenheim 1929 : 54)
- (2) Celui-là ! il est toujours à se mêler de ce qui le regarde pas ! (Saunier 1999 : 270)
- (3) Il est toujours là à se moquer des autres<sup>2</sup>. (三浦 2018)

---

1 現代語において *être à + inf.* を詳細に扱った研究はないが、唯一、Saunier (1999 : 270) が [X *être à Zinf.*, X *rester à Zinf.*] が示す否定的評価に言及している : Je te parie qu'elle est encore à traîner dans les magasins. 「彼女ならきつと、まだ店をまわってうろうろしてるよ」 ; Claude était là, à rire bêtement, pendant que ça commençait à brûler. 「クロードはそれが燃え始めてるのに、バカみたいに笑ってたんだ」 ; Ne reste pas à discuter avec ce qu'il y a à faire dehors. (*Ibid.*) 「外でやることのあるのに、いつまでもしゃべってるんじゃないよ」 ; Je suis restée trois heures à poireauter en plein soleil. 「私は、日が照るなか3時間も待ってたんだ」。また、*être à + inf.* と *rester à + inf.* の両連辞にいかなる差異があるのかということも検討すべき問題であるが、本稿では *être à + inf.* に問題を絞る。また、*être à + inf.* の通時的変遷についての検討は三浦 (2018) を参照されたい。

2 もっぱら話主の否定的評価を示す *être toujours à + inf.* は、副詞の *là* を伴う場合が多く、その存在は任意であるが、場合によっては許容度を左右する場合がある : *Il est toujours là à lui dire des compliments.* vs ?*Il est toujours à lui dire des compliments.* 元々は純粋な進行相を示していた *être LOC à + inf.* が、話主の否定的評価というモーダルな価値を優先していく過程で、空間的状况を具体的に限定してしまう場所の補語より、より抽象的で意味的負担の軽い *là* を選択したとみることができるが、*là* についての詳しい検討は別稿を期す。

とはいえ、現代語において単なる進行相（「～して時間をすごす」）として解釈される場合がないわけではない（cf. (4)(5)）。

(4) Il est là à regarder le ciel. (三浦2018)

(5) Il est dans son bureau à parler avec son camarade. (三浦2018)

前者を評価用法、後者をアスペクト用法とすれば、2つの用法が混在することになるが、実際には、現代語における *être à* + inf. は裸で用いられる (*être à* + inf.) ことは極めてまれであり (cf. ?Il est à travailler)、義務的に付加される時間的・空間的副詞によって次のように容易に用法を判別することができる。比較的具体的な場所を示す補語 (dans sa chambre, dans son bureau, au parc など) を伴う場合は進行相を示し、副詞 *toujours*, *encore* を伴う場合は話主の否定的評価に特化した構文となる<sup>3</sup>。以下、前者を *être LOCALISATION (LOC.) à* + inf.、後者を *être toujours à* + inf. と記述する。本稿では後者の評価用法を主に論じる<sup>4</sup>。

*être LOC. à* + inf. が副詞 *toujours*, *encore* と共起して話主の否定的評価を示すように、*être en train de* もまた、両副詞と共起して否定的価値を示す (*être toujours en train de*)<sup>5</sup>。

(6) Celui-là ! il est toujours à se mêler de ce qui le regarde pas ! (= (2))

(6') Celui-là ! il est toujours en train de se mêler de ce qui le regarde pas !

(7) Elle est toujours à me lancer des mots malins. (= (1))

(7') Elle est toujours en train de me lancer des mots malins.

(8) Je te parie qu'elle est encore à traîner dans les magasins. (Saunier 1999 : 270)

(8') Je te parie qu'elle est encore en train de traîner dans les magasins.

3 事実、*être toujours à* + inf. は否定的価値を含意する動詞 (bavarder, se plaindre, traîner etc.) と極めて親和性が高い。

4 前者のアスペクト用法に関する詳しい検討は三浦 (2018) を参照されたい。

5 Franckel (1989) が指摘するように、*être toujours en train de* は話主の否定的評価を示す発話と親和性が非常に高い : *Tu m'énerves à être toujours en train de pinailler de la sorte / Il faut tout le temps que tu sois en train de fouiner là où tu n'as rien à faire / Il est toujours en train d'avoir les pires histoires avec tout le monde / Il est toujours en train d'avoir oublié quelque chose.* (Franckel 1989 : 79)

上例が示すように *être toujours à* + inf. は *être toujours en train de* と交代可能で、一見すると両構文が示す話主の否定的評価に違いを見出すことは困難である。本稿は以下の2つの問い答えることを目的とする。

- a.) *être toujours à* + inf. の否定的価値はどのように構築されるのか。
- b.) *être toujours en train de* とどのような違いがあるのか。

## 2. 評価用法に義務的に現れる副詞 *toujours/encore*

本節では評価用法において義務的な副詞である *toujours* と *encore* の機能を検討する。義務的であるということは必然的に評価用法において、これらの副詞が重要な役割を負っているとみることができるからである。

Franckel (1989) は副詞 *toujours* の基底的操作を、「当該の述定関係 (X-P) において、あらゆる潜在的差異化が排除され、常に述定関係の妥当性が維持される」と規定する<sup>6</sup>。述定関係に差異をもたらさうる要素は、特定の時点 (cf. (9))、さまざまな時点 (cf. (10))、あるいはそれ以外 (cf. (11)) にかかわる場合がある。

(9) 8h., et il est toujours là. (Franckel 1989: 290)

特定の解釈とされる上例では、話主は当該の述定関係 P <lui – être là> の実現に際し、可能性として *ne plus P* (*ne plus être là* 「もうそこにいる」) を想定していたが、実際にはその潜在的差異 (*être là* 「そこにいる」/*ne plus être là* 「もうそこにいる」) が排除され、あいかわらず <lui – être là> が維持される。たとえば、*Ah ! il est toujours là. Mais j'avais pourtant dit qu'il ne m'attend pas.* という発話では、事前に彼に「先に帰っていいからね」と伝えておいたはずなのに、仕事が終わってロビーにでると、彼が待っていたといった文脈が想定できる。話主は特定の時点 (t spécifique) に定位する P に対し *ne plus P* を想定していたが、その潜在的差異化が排除される。

---

6 Cf. “*Toujours* indifférencie dans une relation X-P les sources d’altérité et d’hétérogénéité susceptibles d’entraîner la rupture de cette relation en tant qu’aucune ne l’entraîne effectivement.” (p. 287)

(10) Il est toujours agréable. (Franckel 1989 : 296)

恒常的解釈とされる上例では、起こりうる差異は様々な時点 (classe des t) にかかわる。どの時点においても、当該の述定関係 P <lui – être agréable> が成立する。例えば、「彼はにこやかだ」といった場合、彼の「にこやかさ」は時点や状況によっては成立しない可能性をはらんでいる。例えば、朝は機嫌が悪いこともあるだろうし、失恋した際には当該の述定関係 P <彼 – にこやかだ> は成立しないこともあるだろう。このように、様々な時点に P' (non P) が可能性として潜むが、toujours は、想定されうるあらゆる時点 (classe des t possibles et envisageables) での可能性としての差異を排除する。「彼はいつでもにこやか」なのだ。

(11) Authentique ou pas, elle est bien belle, cette estampe, toujours. (Franckel 1989 : 287)

潜在的差異をもたらす要素は時間的なものに限られない。上例では美術品の価値が問題になっているが、通常は、絵画や版画など美術品の真贋はその価値を左右する重要な要素である。ここでは、贋作の可能性が述定関係に差異をもたらしうる要素となる。真作だと思っていた版画が、実は贋作であると判明した場合、当該の述定関係 <cette estampe – être belle> が成立しなくなる可能性がある (*elle n'est pas belle : elle est moche*) が、toujours によってその潜在的差異は排除され <cette estampe – être belle> が維持される。いずれの解釈においても、副詞 toujours の操作の本質は「潜在的差異」を排除することにある。

副詞 encore の操作も toujours と同様に「潜在的差異」に作用する。Franckel (1989) によれば、encore (継続用法「まだ～だ」) は、実際に時間軸に定位する事行 P と到達目標としての P' (ne plus P) の非断絶をマークする。encore は実際に起こっている事態 P に対し、自律的に ne plus P を到達目標として構築する。*Il est encore malade.* という発話では、話主は実際に「彼は病気である」(P) という事態に対し、「彼はもう病気でない」(P') を想定する。事行は P から、やがて P' へ到達することが見込まれるが、この P と P' は「連続」(continuité) の関係にあって、時間的に断絶されない(「彼は未だに病気である」)<sup>7</sup>。

以上、評価用法において義務的な副詞 *toujours* と *encore* についての Franckel の考察を見た。いずれの副詞の操作も「潜在的差異」に作用することを確認しておく。副詞 *toujours* の操作は「潜在的差異」を排除し、*encore* は P から *ne plus P* への移行の完了という「潜在的差異」を棚上げにすると理解することができる。

### 3. *être en train de* と *être LOC à + inf.* における「潜在的差異」

評価用法に義務的に現れる副詞 *toujours*, *encore* の操作は「潜在的差異」に作用するので、これらの副詞の使用には「潜在的差異」の存在が不可欠な前提要素となる。「潜在的差異」がなければこれらの副詞が現れる理由がないからである。したがって両副詞が現れないアスペクト用法における両構文 *être en train de* と *être LOC à + inf.* の「潜在的差異」を同定する必要がある。

#### 3.1. *être en train de* と潜在的差異 : *ne plus P* への移行

Franckel (1989) によれば、*être en train de* が示す進行相というアスペクト価値は、当該事行における « *le fait* » (「すでに実現した」) と « *le à faire* » (「これから実現する」) の共存によって得られる。

(12) Je suis en train de planter mes fleurs. (Franckel 1989 : 67)

(13) Le gâteau est en train de cuire. (Franckel 1989 : 71)

上例では、事行 P に対して、話主は P の完了点 (完全に焼きあがった状態 *avoir fini de cuire*) をあらかじめ到達すべき終点として想定しており、事行は

---

7 Franckel (1989 : 291) は *toujours* と *encore* の違いについて、後者が自律的に *ne plus P* を構築するのにに対し、前者のそれは文脈に依存すると指摘している。白雪姫において、女王に尋ねられた鏡が *Oui, Reine, tu es encore la plus belle !* と答えれば、女王の怒りを買う可能性がある (*Comment cela "encore" ?!*)。 *encore* は明確に *ne plus P : ne plus être la plus belle* (「もはや一番美しいのはあなたではない」) を示すからである。それに対し、*toujours* は自律的には *ne plus P* を構築しない : *Oui, Reine, tu es toujours la plus belle !* 他にも、小熊 (2005 : 147) が指摘するように、以前に交わした約束について、*Ça tient encore ?* と尋ねる場合、単なる約束確認に加えて話主は *ne plus P* (「約束がもう有効でない」) を想定しており、約束の無効を懸念する意識があるのに対し、*Ça tient toujours ?* はそうした意識を積極的に示さない。

到達すべき目標である終点を目指す。事行 P 全体 (totalité de P) には、「le fait」(実際に植えた: J'ai planté) と « le à faire » (これから植える: Je dois planter) が共存しており、実際に植え始め、植えているが、想定されている完了点 (J'ai fini de planter) にはまだ到達していない。到達すべき終点は想定されているものの、まだ事行 P 全体は完了しておらず、アスペクトの面での不一致が進行中 (procès en cours) という価値を構築する。

ここで確認しておきたいのは、そのアスペクト価値の構築様式の特徴により être en train de は conation (努力、試み)、あるいは intentionnalité (志向性) という固有の意味価値を持つという Franckel の指摘である。

(14) La voiture, ils sont en train de la réparer. (Franckel 1989: 70)

(15) Il est en train d'enfoncer la porte. (Franckel 1989: 71)

(16) A : Alors, il est fait, ce rapport ?

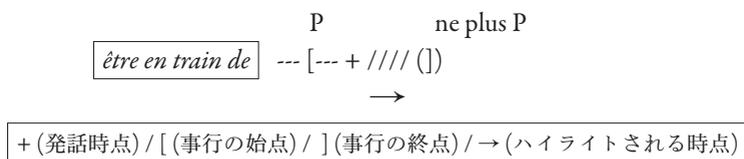
B : Je suis en train de le rédiger. (Franckel 1989: 79)

上例では、事行の終点(「車が修理され、直った状態」/「ドアが開いた状態」)が話主によって、あらかじめ到達すべき目標として想定されており、その結果 conation という意味価値が得られる(「車を修理し終えようと努力する」、「ドアをこじ開けようとする」)。単にある事態が進行中であることを描写する場合には現在形が用いられる。(16)が示すように、「Alors, il est fait, ce rapport ?」という質問には、現在形ではなく、「レポートの完成を目標とし、そこに到達しよう努力している」という含みを出すために « Je suis en train de le rédiger » と答えるのが自然である。また、Franckel (1989) は、conation や intentionnalité といった価値における、当該事行の成立、つまり終点への到達という事行の潜在的な完了は話主にとって好ましい (bonne valeur) ものとしている (cf. p. 66)。

Franckel の考察にならない、本稿では être en train de のアスペクト価値と「潜在的差異」を以下のように考え図示したい。() は終点が潜在的であることを示す。

(17) 当該事行の終点 (ne plus P 「もう～していない」) が到達すべき目標として主観的に設定され、展開中の時点から終点への潜在的移行とその未達成(終点への志向性)がハイライトされる。到達目標とする ne plus P へ

の未到達が進行相という価値をもたらす：「未だ ne plus P に到達しない」。



[図1] être en train de におけるアスペクト価値の構築様式

(14) では、P「修理中（修理している）」から ne plus P「修理完了（もう修理していない）」への移行が、(16) では、P「執筆中だ」から ne plus P「執筆完了（もう執筆していない）」への移行の未達成（図の /// 部）が進行相というアスペクト価値を構築する。être en train de では、「P から ne plus P への移行」によって当該事行に「潜在的差異」が示されることになる。

### 3.2. être LOC à + inf. と潜在的差異 : autre que P への移行

être en train de は P に対して ne plus P を想定することで潜在的差異を生み出す。それに対し、être LOC à + inf. は当該事行に ne plus P を到達すべき終点として想定しない。être LOC à + inf. は ne plus P を到達目標として目指すことで得られる意味価値 conation を含意することができないからである。

(18) Ils sont en train de réparer la voiture. (三浦2018)

(18') Ils sont dans le garage à réparer la voiture. (Ibid.)

(18) では、話主はあらかじめ当該事行に到達すべき目標として終点（ne plus P「もう修理していない」）を想定し、事行はその終点（「車がすっかり修理された」）へと向かう。その結果、「彼らは車の修理を完了しようと努力している」という含みが出るのに対し、être LOC à + inf. に置き換えた(18')ではそうした含みを出すことができない。(18')では、単に展開中の事態が描写されている印象を受ける（「彼らはガレージで車を修理している」）。それでは être LOC à + inf. はどのように事行に「潜在的差異」もたらすのか。本稿では、être LOC à + inf. は、到達すべき目標として ne plus P ではなく autre que P を想定することで、結果的に意味効果として進行相というアスペクト価値を構築すると主張したい。事実、être LOC à + inf. は、P に対して別の事態（autre que P）を想定

する文脈的傾向が非常に強い。

- (19) Il est dans son bureau à parler avec son camarade (*quand tout à coup* le téléphone sonne.) (*Ibid.*)
- (20) J'étais là à parler avec mes copines (*quand soudain* on m'a dit "Ah !, t'as gagné au loto.") (*Ibid.*)
- (21) Elle était là à admirer les étoiles, (*quand soudain...*) (*Ibid.*)
- (22) Un jour pendant qu'il est au parc à lire son journal, Walter note *une nouvelle qui le frappe*. (映画 *Nessun messaggio in segreteria*, 2005 のレジュメより抜粋<sup>8</sup>) (*Ibid.*)
- (23) Ça fait deux ans et demi qu'il est dans son bureau à couper dans les budgets sans parler à personne et, *soudainement*, il décide que ce sont les agriculteurs et les transformateurs qui ne consultent pas les consommateurs.

「2年半もの間、彼（農務・農産食品省の大臣であるピエール・パラディス）は、オフィスで誰とも話さずに様々な予算編成に没頭し、そして突然、農産物生産者と農産物加工業者こそが消費者の意見に耳を傾けていないと決めつけるのだ。」(CNW Telbe, le 6 sept. 2016, article intitulé *Sommet sur l'alimentation*, cité de l'Internet, <https://pq.org/nouvelles/sommet-sur-l'alimentation-une-strategie-agroaliment/>)

上例のように *être LOC à + inf.* は後続文に、突発性の副詞的表現 (*soudain*, *d'un seul coup...*) を要求する強い文脈的要請があり、*être LOC à + inf.* によって示される当該事行 P の中断と後続する別の事行 *autre que P* の突発が示唆される。

また、当該事行 P に対して *autre que P* を到達目標とするという特質がゆえに、*être LOC à + inf.* によって示される事行は、話主から否定的に評価される傾向が強い。話主は *autre que P* を到達すべき目標として想定する以上、当該事行 P からの離脱が不可欠であり、結果として、当該事行 P は *autre que P* へ

---

8 Cf. 文脈を示しておく : Walter est un retraité qui a appris à gérer au mieux le temps. Egoïste, plein de fantaisie, jamais pathétique, il est un stratège pour faire passer les minutes de ses longues journées. Il met en vente sa maison sans intention de la vendre seulement pour parler avec quelqu'un, et devient ami d'une enfant de 10 ans, Sara qui le suit dans ses petites folies. Un jour pendant qu'il est au parc à lire son journal, Walter note une nouvelle qui le frappe : selon les nouvelles données ISTAT pour chaque jeune qui travaille il y a un retraité à maison. Ça vaut la peine... de travailler dessus.

の移行を妨げる障害物となる。したがって当該事行 P は話主にとって離脱すべき、望ましくない事行となる傾向が強く、結果として話主の否定的評価が示されるとみることができる<sup>9</sup>。

(24) Il est là à regarder le ciel, *alors qu'il a autre chose à faire...* (三浦 2018)

(23') Ça fait deux ans et demi qu'il est dans son bureau à couper dans les budgets sans parler à personne et, *soudainement*, il décide que ce sont les agriculteurs et les transformateurs qui ne consultent pas les consommateurs. Le ministre devrait sortir de son bureau et se rendre dans une des multiples entreprises dynamiques qui œuvrent dans le secteur ; ainsi, il pourra comprendre, voire constater, de quelle façon celles-ci consultent constamment les consommateurs et s'informent de leurs besoins.

「2年半もの間、彼（大臣）はオフィスで誰とも話さずに様々な予算編成に没頭し、そして突然、農産物生産者と農産物加工業者こそが消費者の意見に耳を傾けていないと決めつけるのだ。大臣はオフィスから飛び出して、農産加工部門で働く活動的な多くの企業を訪ねていくべきであろう。そうすれば、彼は、理解する、いや確認するだろう。どのようなやり方で、こうした企業が絶えず消費者の意見に耳を傾け、彼らの要求について情報を得るかを。」

(24) は、母が息子に対し、他にやるべきことがあるのに空なんて眺めていると息子を非難している文脈が考えられよう。話主は当該の事行 P「空を見ている」とは別の事行 *autre que P*（例えば「宿題をやる」など）の実現を望み、息子に対し、P から *autre que P* への移行を促しているとみることができる。次に、(23) の例の後続文脈（下線部）を示した (23') であるが、話主は大臣に対し、P（「オフィスに閉じこもる」）から離脱し、*autre que P*（「オフィスを出て、たくさんの企業を訪ねて、外部の意見を聞くべきなのに…」）への移行を望んでいるとみることができる。

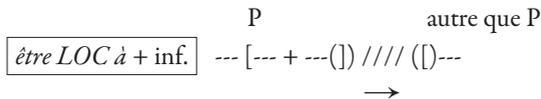
以上の考察を踏まえ、本稿では *être LOC à + inf.* のアスペクト価値と「潜在

---

9 *être LOC à + inf.* によって示される事行は話主から否定的に評価される傾向が極めて強い。突発性の副詞的表現についての詳しい検討と併せて、詳細は三浦 (2018) を参照されたたい。

的差異」を以下のように考え図示したい。

- (25) *être LOC à + inf.* は移行すべき到達目標として *autre que P* を想定し、当該事行 P から *autre que P* への移行の未達成をハイライトする。到達目標とする *autre que P* への未到達が進行相という価値をもたらず：「未だ *autre que P* に到達しない」。



〔図2〕 *être LOC à + inf.* におけるアスペクト価値の構築様式

*être LOC à + inf.* では「P から *autre que P* への移行」によって当該事行に「潜在的差異」が示されることになる。

#### 4. *être toujours en train de* と *être toujours à + inf.*

本節では、評価用法 *être toujours à + inf.* に義務的である副詞 *toujours* と *encore* の操作が、*être en train de* と *être LOC à + inf.* のそれぞれの「潜在的差異」にどのように作用するのかを検討する。

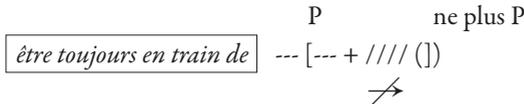
Franckel (1989 : 298) が指摘するように、*être toujours en train de* では、*toujours* の操作が、当該事行 P における終点への潜在的移行、つまり、*ne plus P* への潜在的移行に作用することになる<sup>10</sup>。*Il est toujours en train de lire.* という発話では、

10 *Toujours* marque que en ti singularisé (interprétation actualisée) ou en quelque t que ce soit (interprétation générique), il y a localisation de P à l'exclusion de l'atteinte de I : *toujours* bloque ici le passage à l'accompli. *Être toujours en train de P* signifie *n'avoir pas fini de P* ou *n'en avoir jamais fini de P*. (Franckel 1989 : 298) 「*toujours* は特定の時点、あるいは任意の複数の時点において、当該事行が終点に達することなしに P が時間軸に定位することをマークする。*toujours* は事行の完了点への移行をブロックする。*Être toujours en train de P* は *n'avoir pas fini de P* あるいは *n'en avoir jamais fini de P* を意味する。」

たとえば、恒常的解釈を示す *Il est toujours en train de faire l'idiot*. 「彼はいつもバカなことをしている」という発話は、想定されうるあらゆる時点において、外部 (*ne plus P* : *ne plus faire l'idiot*) への移行がブロックされることを示している。想定されうるあらゆる時点への *ne plus P* <lui - *ne plus faire l'idiot*> の定位可能性はブロックされる。彼はいついかなるときも「バカなことをする」。

特定の解釈と恒常的解釈がともに可能（「(今) 彼は相変わらずなにか読んでいる」/「彼はいつもなにか本を読んでいる」）であるが、いずれの解釈においても *toujours* は当該事行に対し、終点すなわち *ne plus P*（もう本を読んでいない）への移行を阻害している。本稿では *être toujours en train de* において副詞 *toujours* の操作は以下のように作用すると考えたい。

(26) *toujours* は *être en train de* がマークする *ne plus P* への移行を無効にする。



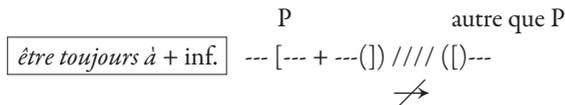
[図3] *être toujours en train de* におけるアスペクト価値の構築様式

(27) Eh ! non, elle est toujours en train de me lancer des mots malins. (= (7))

(27) では、話主は、P「意地悪を言う」に対し、*ne plus P*「もう意地悪を言わない」を到達すべき好ましい終点として想定するが、その移行の完了は *toujours* によって無効化される。この移行の阻害が話主の否定的評価（「相変わらず彼女は意地悪を言う。」）を構築する。

それに対し、*être toujours à + inf.* において副詞 *toujours* の操作は以下のように作用すると考えたい。

(28) *toujours* は *être LOC à + inf.* がマークする *autre que P* への移行を無効にする。



[図4] *être toujours à + inf.* におけるアスペクト価値の構築様式

(29) Eh ! non, elle est toujours à me lancer des mots malins. (= (1))

(30) Celui-là ! il est toujours à se mêler de ce qui le regarde pas ! (= (2))

話主は *autre que P* を到達すべき目標として設定し（*Il doit être gentil et sincère avec tout le monde, ou il s'applique à son travail ou à des choses qu'il faut faire... etc.*）、その移行の完了を望むが、*toujours* によって *autre que P* の実現可能性は無効化

される。事態は当該事行 P にとどまり、あらゆる *autre que P* への移行完了可能性は排除される。*toujours* により、離脱すべき P から到達すべき *autre que P* への移行がブロックされることで話主の否定的評価が構築される<sup>11</sup>。

(31) « Jenny, ma voisine de palier, est formidable, avec elle, quand je discute, je me sens comprise et elle m'aide à mieux me comprendre, affirme Lucie, 36 ans. Tandis qu'avec Aurélie, qui habite au-dessus de chez moi, impossible de placer un mot, elle est toujours à parler d'elle ou à interpréter mes propos d'une façon totalement insensée. »

(*Psychologies*, article de juin 2010, intitulé “Pourquoi tant de malentendus ?”, cité de l'Internet, <https://www.psychologies.com/Moi/Moi-et-les-autres/Relationnel/Articles-et-Dossiers/Reussir-a-mieux-se-parler/Pourquoi-tant-de-malentendus>)

「同じ階に住むジェニーは素晴らしい人なんです。彼女と話していると、自分が理解されていると実感できるし、彼女のおかげで、自分の言いたいことがよりよく理解できるのよ」とリュシー（36歳）は話す。「それにひきかえ上の階に住んでるオーレリーときたら。こっちが話す隙を与

11 *être toujours à + inf.* とは違い、*être toujours en train de* が問題とする事行は、当該事行 P の終点 (*ne plus P*) であって、当該事行とは別の事行 (*autre que P*) を自律的には考慮しないことを主張しておきたい。Franckel (1989 : 299–300) は *Il ne fait que de P* を類似表現である *Il ne fait que P* と比較したうで、*Il est toujours en train de P* と *Il ne fait que de P* との強い類似性に言及している。*Il ne fait que de jouer.* という発話は「彼はいつも遊んでいる」(*Il ne cesse pas de jouer.*) という恒常的解釈になる。想定されうるあらゆる時点において *ne plus P* 「遊んでいない」への移行がブロックされ、あらゆる時点において当該の述定関係 P <lui – jouer> は P としてしか定位せず、*ne plus P* <lui – ne plus jouer> (P') として定位することはない。ここでは、P' は *ne plus P* であり *autre que P* を意味しない。つまり *jouer* という事行のみが問題となる。それに対し、*Il ne fait que jouer.* という発話は、特定の時点に実現した事態を問題としており、「その特定の時点で実際に起きたことは、*jouer* であり、それ以外のことは起きていない」と注釈できる。よって *Voyez ! Il ne fait rien de mal ! Ce qu'il fait ne relève que du jeu.* (p. 299) 「彼は悪いことはしてない。ちょっとふざけてただけなんだ」といった文脈が想定される。たとえば、怪しい挙動をみて不審に思った警官に職務質問をされる友人を擁護する場面などが想像できよう。この場合、話主は、対話主（警官）によって想定されうる事態の総体（警官は話主の友人が *jouer* 以外の何かよからぬことをしていたのではないかと疑っている）の中で、実際起こったのは P <lui – jouer> であり、そのほかの想定されていたあらゆる事態 *autre que P* (P') は起こらなかったことを主張する。よって、*Il ne fait que jouer.* 「彼はふざけてただけだ」では当該の事行 *jouer* 以外の事行が想定されていることになる。

えないんです。彼女はいつも自分のことを話してるし、考えられないような仕方です。」

(31) は、話主であるリュシーが、2人の対照的な隣人ジェニーとオーレリーについてあれこれ言っているインタビューでの発言であるが、話主は当該事行 P、つまりオーレリーの振舞い「自分のことばかり話して、自分の言うことを曲解する」に対して、話主が冒頭で言及しているジェニーの理想的な振舞いが *autre que P* として話主に想定されているとみることができる。話主は P から離脱し、*autre que P* への移行を望むが、それは *toujours* によって無効化されてしまう。

*être toujours à + inf.* が構築する否定的価値は非常に強固なもので、動詞自体に内在する評価とは無関係に、自律的に話主の否定的評価を示す。

(32) *Il est toujours là à vouloir m'aider. / Il est toujours là à vouloir me protéger.* (三浦 2018)

(33) *Il est toujours à vouloir se mettre à côté d'elle.* (*Ibid.*)

上例のように、*aider* といった肯定的評価を有する動詞であっても、事行は話主によって否定的に評価される。(32)、(33) (*aider / se mettre à côté d'elle*) では、「頼んでもいないのに、いつも私におせっかいをやきたがる。ありがた迷惑なのよ。」といった文脈が想定され、*Il est toujours là quand j'ai besoin de son aide.* (「彼は、困ったときいつもそばにいてくれる。」) と解釈することはできない。

*être encore à + inf.* では、副詞 *encore* は *être LOC à + inf.* によってマークされる *autre que P* への移行を柵上げ状態にする。移行が柵上げにされることで、話主は、話主にとって離脱すべき不快な事行 P に留まることになる(「いつまでたっても *autre que P* へ到達しない」) (cf. *Je te parie qu'elle est encore à traîner dans les magasins.* (Saunier 1999 : 270) 「彼女ならきっと、まだ店をまわってうろろしてるよ」)。この場合 *autre que P* として「門限までに帰宅する」(はやく帰宅しなければならないのに、未だうろろしている) のごとき具体的な文脈が想定される傾向が強いとみられる。それに対し、*être encore en train de* では、当該事行 P における *ne plus P* への到達が柵上げにされることで否定的評価が構築されることになる(「いつまでたっても *ne plus P* へ到達しない」) (cf. *Je te parie qu'elle est encore en train de traîner dans les magasins.*)。

## 5. まとめと課題

本稿では、*être à + inf.* (*être LOC à + inf./ être toujours à + inf.*) の評価用法における話主の否定的評価の根拠を、義務的に付加される副詞に着目しつつ明らかにし、また、評価用法における *être toujours en train de* との違いを指摘した。本稿冒頭の問いに以下のように解答する。

(再掲)

a.) *être toujours à + inf.* の否定的価値はどのように構築されるのか。

b.) *être toujours en train de* とどのような違いがあるのか。

a.) *être LOC à + inf.* では、*autre que P* を要請するというアスペクト価値の構築様式の性質により、話主は当該事行 *P* を離脱すべき事態としてとらえるので、否定的評価を示す傾向が強い<sup>12</sup>。否定的評価は *toujours* の操作によってより鮮明になる。*être toujours à + inf.* では、話主が到達目標とする *autre que P* への移行が *toujours* により無効化されることで、話主は、話主にとって離脱すべき不快な事態 *P* からの離脱不能に陥る。

b.) *P* に対し *autre que P* を想定する *être LOC à + inf.* とは違い、*être en train de*

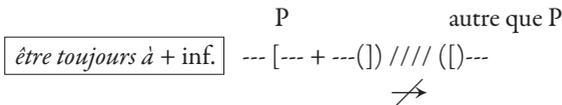
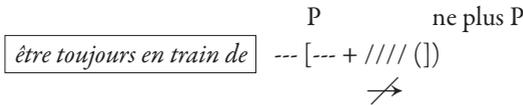
---

12 L'action se déroule entièrement à Paris. Alors qu'il est dans son bureau à écouter les élucubrations d'une plaignante, le commissaire Maigret reçoit un appel téléphonique d'un homme qui se déclare être suivi par un ou plusieurs individus qui veulent attenter à sa vie.

「事件はパリで展開する。司法警察のメグレ警視が、オフィスで告訴人のうんざりするような被害妄想じみた訴えに付き合っていると、見知らぬ男から電話がかかってくる。男は数人の男からつけ狙われ、命が危ういと訴え、助けを要請する。」(Georges Simenon, *Maigret et son mort*, 1948のレジュメより抜粋)

上例では、話主(書き手)によって、当該事行 *P* が「離脱すべき事態」として否定的に捉えられている。事実、物語本文でも、この告訴人はひたすら奇異な主張を繰り返し、メグレ警視は追い返すわけにもいかずうんざりしている。この場合、「他に取り組むべき案件がある」といった *autre que P* が到達すべき事行として暗示されているとみることができる。それに対し、テレビドラマ化(2017年2月に France 3にて放送)された際の宣伝用レジュメでは *Alors qu'il est dans son bureau,...* とされており、電話を受けた際の状況を単に描写している印象を受ける。(cf. *Alors qu'il est dans son bureau*, le commissaire Maigret reçoit l'appel téléphonique d'un homme qui dit être suivi depuis la veille par plusieurs individus. L'homme est convaincu qu'on en veut à sa vie et demande à être protégé.)

が問題とするのはあくまで当該事行 P の終点 ne plus P であり、移行すべき autre que P を自律的には考慮しない。Celui-là ! il est toujours en train de se mêler de ce qui le regarde pas ! では、話主の ne plus P への移行（「とにかく当該事行 P に終止符をうつ」）がブロックされることで否定的評価が生じるのであり、話主は具体的に到達すべき事行として autre que P を想定しているわけではない。以下に図3と4を再掲する。



être toujours à + inf. における、副詞の là の詳しい検討や、動詞 vouloir との共起<sup>13</sup> についての検討は機会を改めて取り組むこととしたい。

13 両構文の違いは、être en train de がもっぱら当該事行 P のみをその射程に取めるのに対し、être à + inf (être LOC à + inf./ être toujours à + inf.) が自律的に autre que P を考慮するという点に集約される。その根拠となる制約は、conation (努力、試み) を含意できるか否かと、être LOC à + inf. が自律的に autre que P の生起を要請する (quand soudain.../ alors qu'il a autre chose à faire...) ことであるが、後者に関しては、必ずしも文脈上に明示されるとは限らず、話主の評価という主観的レベルで暗示されるにとどまる場合もあり、直観的であるという批判が想定される。それに関して、動詞 vouloir との親和性の高さを指摘しておきたい。

(32') Il est toujours là à vouloir m'aider.

?Il est toujours là en train de vouloir m'aider.

(33') Il est toujours à vouloir se mettre à côté d'elle.

?Il est toujours en train de vouloir se mettre à côté d'elle.

上例では、être toujours à + inf. が vouloir との共起を好む (vouloir なしでも「彼はおせっかいだ」という否定的価値を示すが、vouloir がある方がより自然な発話となる) のに対し、être toujours en train de では若干許容度が下がる。通常、動詞 vouloir はその本性からして未実現の事行と結びつく。事態はいまだ開始しておらず、アスペクトの境界設定という観点からみれば事態は未だ開始点の手前であり、事行は外部から内部 (当該事行の始点) へと向かう：



ところで、être toujours en train de はそのアスペクト価値の特質からもっぱら事行内部のみを問題とし、事行は展開中である事行内部から、その終点 (ne plus P) へと向かう。当該事行の始

[参考文献]

- Benveniste, É. (1974), *Problèmes de linguistique générale T. 2*, Paris, Gallimard.
- Cadiot, A., Ducrot, O. et al. (1985), Sous un mot une controverse : les emplois pragmatiques de toujours, *Modèles linguistiques*, 7 (2), pp. 105–124.
- Culioli, A. (1999), *Pour une linguistique de l'énonciation – Formalisation et opérations et repérages T. 2*, Paris, Ophrys.
- Damourette, J. & Pichon, É. (1911–1933). *Des mots à la pensée. Essai de Grammaire de la Langue Française, Tome III*, Paris, Collection des linguistes contemporains, d'Artrey, puis Vrin.
- Franckel, J.-J. (1989), *Étude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Genève, Droz.
- Gougenheim, G. (1929). *Étude sur les périphrases verbales de la langue française*, Paris, Les Belles Lettres.
- Saunier, É. (1999). Contribution à une étude de l'inchoation : *se mettre à* + inf. Contraintes d'emploi, effets de sens et propriétés du verbe *mettre*. In: S. Vogeleer, A. Borillo, M. Vuillaume, C. Vetter (éds.). *La modalité sous tous ses aspects*. Amsterdam/Atlanta: Rodopi. (Cahiers Chronos; vol. 4, pp. 259–288).
- Souesme, J.-C. (2003), *Grammaire anglaise en contexte*, Paris, Ophrys.
- 小熊和郎 (2005), 「déjà と encore」『フランス語を深る——フランス語学の諸問題 III』pp. 143–155, 三修社.
- 小熊和郎 (2014), 「フランス語現在形と不定性」『フランス語学の最前線 2』pp. 249–294, ひつじ書房.
- 髙郁彦, 川島浩一郎, 渡邊淳也 (2008), 『フランス語学概説』, 三恵社.
- 三浦龍介 (2018), 「構文 *être à* + infinitif の否定的価値をめぐって」『フランス語フランス文学研究』, 112号, pp. 19–33, 日本フランス語フランス文学会.

---

点の手前であれ、終点の向こう側であれ、いずれにせよ事行の外側を考慮しないので、動詞 *vouloir* との共起に支障をきたすとみられる。それに対し、*être toujours à* + inf. は継起するイベントの間 (はざま)、つまり事行の外部を問題とする (---)////[---] ので *vouloir* との共起に問題はない。換言すれば、*être toujours à* + inf. は、これから起こる事態 (autre que P : 私に手を貸してる暇があったら自分の仕事をしっかりやってほしい／放っておいてほしい etc.) を示唆できるが、*être toujours en train de* は autre que P に言及しにくいといえる。